

富岡西が選抜初出場



1回戦で優勝校の東邦に善戦した富岡西の選手たち—3月26日、甲子園球場

2019 徳島 スポーツ回顧

◁1▷

県内スポーツ界は富岡西高が春の選抜甲子園に初出場したのをはじめ、日本初開催のラグビーワールドカップではジョージア代表が鳴門市で事前キャンプを行うなど2019年も話題に事欠かなかった。主な出来事を振り返る。

第91回選抜高校野球大会に21世紀枠で出場した富岡西。創部120年目に春夏を通じて初めて甲子園の土を踏み、1回戦で大会最多と

に好印象を残した。富岡西は3月26日の大会第4日に登場。10月のプロ野球・ドラフト会議で中日から1位指名された投手の柱、石川を擁する東邦と対戦。エース浮橋が緩急を巧みに使って東邦の強力打線に立ち向かい、単打だけの9安打に抑えて接戦に持ち込んだ。三回に1点を先行されたものの、六回2死一、三塁から木村の右翼線二塁打で同点。その後一打逆転まで迫った。しかし後続が倒れ、七回に2点を勝ち越されて1-3で敗れ

選手の自主性で好勝負

富岡西の戦いで注目されたのは、選手たちが状況に応じて判断する「ノーサイン野球」。戦力の限られた公立校が強豪校と渡り合うための戦術であると同時に、選手が社会に出てからの自己判断力を養う目的で小川監督が導入した。明治神宮大会で3度優勝した東亜大の中野元監督(現阿南市野球のまち推進課アドバイザー)に教えを請い、チーム力を磨き上げた。

練習では実戦形式を重視した。走者と打者の動きなど、かみ合わなければすぐにサインが集まり原因や改善点を話し合っ確認し、全員で考えを共有していた。

甲子園では、六回に一塁走者の吉田と打者の安藤が2人の判断でランエンドヒットを成功させ、同点の足場をつくった。選手たちは大舞台でも伸び伸びとプレー。右打者の栗田がラインの緊張を和らげようと左打席に入るなど、柔軟な発想を披露した。

野球を通じたまちづくりを進める地元・阿南市も整った練習環境を提供するなど、甲子園出場を後押しした。県内有数の伝統校らしく、アルプスには全国から卒業生らが集まった。大声援を送り続けた応援団も応援賞最優秀賞を受賞。ベンチ、スタンドが一体となって富岡西の歴史に新たなページを刻んだ。

(城福章裕)